

【資料紹介】

翻印『日本大唐わうらいの事』

武田 祐樹

【解題】

ここに紹介する『日本大唐わうらいの事』は、林羅山（一五八三―一六五七）による日中外交史であり、正保三年（一六四六）に成立した。表紙と遊紙を除き全二四丁から成る、一冊の写本である。その記述は漢字ひらがな交じりのくずし字によるものであり、神功皇后の時代から正保三年までを対象とする。また、印記「秘閣／圖書／之章」（陽刻方印、見返し中央）と同じく印記「秘閣／圖書／之章」（陽刻方印、第二四丁表左下）により、紅葉山文庫旧蔵本であることを知る。なお、林鷺峯（一六一八―一六八〇）が編んだ林羅山の「編著書目」には「日本大唐往来」として名を連ねる。

『日本大唐わうらいの事』の伝本は少なく、またそれらは全て写本である。内閣文庫に三本伝わる他には、静嘉堂文庫に一本、島原図書館肥前島原松平文庫に一本、そしてハーバード大学燕京図書館に一本が伝わるのみである。

なお、内閣文庫所蔵の三本の内、一本は明治以降に筆写されたものである。残りの二本の間には、大きな差異は見受けられない。ただし、漢字ひらがな交じりのくずし字で記された和文、という形式に起因する、表記のブレや若干の行格のズレは確認できる。しかし、それら以外に文字の異同等は存在しない。また、紙質や墨の色、文字の書きぶりなど、多くの要素が相似する。よって、残りの二本については、林羅山が徳川幕府に献上する際に作成した、主本と副本の関係にあるものと推測できるのである。

『日本大唐わうらいの事』に採録される記事は、左の通り。大別して、一〇段からなる。記事の整理に際して「日本」という語を用いるのは、『日本大唐わうらいの事』という内題が提示する視座に従うものである。

一 孫権による日本侵攻とその失敗（第二丁表）

- 二 慕容廆による日本侵攻とその失敗（第一丁裏）
- 三 白村江の戦いにおける日本の敗北（第二丁表～第四丁裏）
- 四 安祿山の乱に際する日本側の対処（第四丁裏～第五丁裏）
- 五 元寇における元軍内の不和（第五丁裏～第一七丁裏）
- 六 日本国王懷良が洪武帝にあてた手紙（第一七丁裏～第一九丁表）
- 七 胡惟庸の造反と日本側の暗躍（第一九丁裏～第二一丁表）
- 八 倭寇平定の褒美としての日明貿易（第二一丁表～第二二丁裏）
- 九 勘合貿易にまつわる醜聞（第二二丁表～第二三丁裏）
- 十 勘合貿易の終焉から正保の時代に至る空白期間（第二四丁表）

各段冒頭には、多くは院号を掲げられており、当該資料が日本側の視点に立って編まれたものであると知る。しかし、院号など用いぬ時代については、「くわうこう」（皇后）・「天王」・「天皇」といった表記が確認できる。また、淳仁天皇（淡路廢帝）については、「はいたいと申すみかど」という表現が用いられる。ただし、元寇や日明貿易に関する記事の内部については、大唐（中国）の資料に依拠したためか、大唐側の元号を用いること度々である。

当該資料が依拠する書籍については、『日本書紀』や『続日

本紀』、『元史』や『紀政綱目』、あるいは「唐書」や「呉国の書」などが挙げられている。しかし、概して出典が明記されておらず、また調査を行ってもはかばかしい成果をあげられない例がままあった。孫権（第一丁表）や慕容廆（第一丁裏）などの記事は、その顕著な例である。それらしい記事は見つかるものの、ピタリとは一致しない。『日本大唐わうらいの事』が依拠する書籍の同定しがたさは、この資料が優れて同時代的な、つまり当時における現代史的な問題意識のもとに編まれていることと関係があらう。

『日本大唐わうらいの事』は、正保三年の成立であることから推察されるように、鄭芝龍（一六〇四～一六六一）からの援軍要請を契機として編まれた。この時期（正保三年一〇月）、林羅山は、援軍派遣を行うか否かを問題とした密議に、数度にわたり参加している。結果として、援軍派遣は見送られ、物質の援助をのみ行うことと相成った。そして、幕閣らの関心は、むしろ沿岸地域の防備に集まってゆく。

『日本大唐わうらいの事』は、まさに斯かる日本側の決定や興味関心と、相即の関係にある。一段・二段・五段は、大唐からの侵略に関する記事である。三段は、大唐と争った例である。四段は、大唐における紛争が飛び火するのを避けた例である。六段からは、日明関係についての記事である。

六段目以降については、日本国王懷良の「懷」字に添え仮名

「やす」を付している点が興味深い。また、足利義満（一三五八―一四〇八）による日明貿易を、倭寇平定に対する「成祖皇帝」（永楽帝）からの「享物」と記す点も、当時における認識を端的に示しているよう。

総じて、『日本大唐わうらいの事』記述は、大唐との過度な接近を恐れる日本側の対応を追認し、裏付ける態度で貫かれている。したがって、一七世紀中頃の徳川幕府外交政策と、林羅山が当時にあつて果たした歴史的役割の、両面を考える上で有益な資料である。よって、ここに解題と共に翻印する。

【翻印】

凡例

- 一 国立公文書館内閣文庫所蔵『日本大唐わうらいの事』（請求記号：特〇三二―〇〇〇三）を底本とする。
- 一 翻印は、なるべく底本の体裁を残すことを基本とし、漢字表記については、なるべく底本の用字に従った。
- 一 底本の変体仮名は、ひらがなに改めた。
- 一 原則として、底本の行詰め・字詰めに従った。
- 一 丁表・丁裏の変わり目には、第一丁表／＼第二四丁表を補入した。

第一丁表

日本大唐わうらいの事

日本人皇十五代じんぐうくわうごうのとき
呉國^{こく}の王そんけん一万餘人のつはものを
おこしふねにのせ日本をせめんとてうみ
にかぶ日本ちかき海上にてゑきさいの
やまひにかゝり人おほくしにければむなし
くかへる

第一丁裏

日本十六代おうじん天王のときゑん王
はようくわいといふ者北國の大名にてれう
とうをうちとりそのつゐでに日本をせめんとて
一万餘人の軍勢をさしこすといへども路
次とをふして来る事あたはずたゞし
時代はるかなればくわしくしれず

第二丁表

日本三十九代天智天皇のときしんら
の國大唐へしたがひければ大唐の大將
大勢をひきひしんらのつはものを同道
しはくさいの國をもちうらいの國をもせめ
うつはくさいかうらいより日本へ加勢をこふ
天智天皇西國へ行幸ありてあまたの
軍兵をはくさいかうらいへつかはさる矢十

万すぢなめしがは千枚米三千石いとわた

第二丁裏

布のたぐひまではくさい國へたまふ日

本の加勢かうらいへわたるとき大唐の

大将一人は病死し一人はうち死す別の

大将そていはう蘓定方といふ者名たかきつはもの

なれどもはいぐんしてかへるはくさいもかうらい

も日本の加勢をよろこぶことなめならず

その、ち大唐より兩人の大将をつかはしはく

さいをせめやぶるはくさいより又加勢を

第三丁表

こふ天智天皇さいのむらじたぎつとい

える二人の大将をつかはし又別の大将に二

万七千人をさしそへてしんらくをせめしむ

又日本よりいほらぎみといへる大将に一万

餘人をあひそへてはくさいの加勢とすはく

さいこく王よろこびて路次へいでむかつて

日本の軍勢をもてなす此とき大唐より

大将三人つはものをひきひきたりてしん

第三丁裏

らくこくの人とだんかふしうみとくがと二手

にわかれてはくさいの城をかこみせむ唐の

大将二人はくがよりむかひ一人はふなてより

むかふ百七十そうはくそんこうといふ所まで

おしよする時日本のひやうせんとゆきあふて

ふないくさあり日本人すこしひきしりぞく

やがて日本の軍勢かさねて唐人のぢんへ

うつてかゝる唐の軍勢うみとくがと一つに

第四丁表

なりてひだりみぎよりはさんでうつ日

本人ふせぎた、かふ事たけしといへども

大てきなればちからなくやぶれて水に

おはれて死ぬるものもすくなからず日本の

大将たぎつみかたのやぶれんとするを見

て大にいきりてうちじにすべしとちかひ

唐のつはもの数十人をきりころしその

身もつるにうたれぬ大唐の人々このた

第四丁裏

ぎつがいさみた、かつてうちじにしたる事を

ほめたりとなむそのほかの日本人はみななにごと

なくひきかへす 日本紀にも唐書にも見えたり

日本四十七代はいたいと申すみかどはしやうむ

崩じて後かうけん天皇のゆづりをうけてそく

るあり大唐のしゆくそうの代にあたるしゆく
そうはげんそう皇帝の子なりあんろくさんが

第五丁表

ひやうらんのとかなればしゆくそうより牛の
つのを日本へもとめらるこれによりて諸國へ
ふれてうしのつの七千八百本大唐へつかはさる
唐のゆみをつくるにはすいぎうのつのをを用る
ゆへなるべし 日本にてせんぎしけるはあんろく
さんはむほんぎやくしんのものなればしばらく
世をみだるといふとも本意をとぐべからずた、
かひまけてのちもし日本ちかき海邊へき

第五丁裏

たりてらうぜきする事もあるべきかとて
つくしのばん所へその用心すべしとふれつ
かはす 續日本紀しよくにあり

日本八十九代かめやまの院の御代かまくら
北條時宗のときなり時宗はさいみやうじの子
なりこのときたつたんごくの内むくこくの
王つはものをおこし大唐四百餘州をうち

第六丁表

とりその名をかへて大げんのせいそ皇帝と

いふせいその至元しげん元年は日本の文永元年に
あたるせいそしよかんを日本へおくるおもむきは
われ四百餘州をとりて天下のぬしたりしよ

こくしまぐまでもみなきたりしたがはずと云
事なし日本へも通ずべしとて使者兩人に

しよかんをもたせて先かうらいへつかはしかう
らい人をあんないしやとして日本へわたるべしと

第六丁裏

なりかうらいの王これを聞て兩人の使者を相
そへ日本へつかはすろくちとをしとてみちより
かへる時に至元三年なり 明年六月大げんより
使者をつかはしかうらい王へたづねけるは何とて
大元の使者を日本へとゞけざるやあやしき
事なり日本國のていをしるやうにせよといふ
かうらい王うけたまはりてみちとをふしてなん
じよあり大げんのちよくしのたやすくとをる

第七丁表

べきみちにあらざとこたふこれによりて
別の使者を日本へつかはす六む月つきのあいだどう
りうして日本へわたる事かなはずしてかへる
至元五年九月大げんの使者兩人しよかん
を持ってつしままで來る日本これをせう

ゐんせずこれによりて日本のとう二郎

弥二郎兩人をとらへて大げんへかへるその
明年とう二郎弥二郎をかうらいへわたしそれ

第七丁裏

より日本へおくりかへすかうらいのあんないしや
大げんのしよかんを持てちくぜんのさいふに
とうりうすといへども日本より返事なし

同年十二月大元より趙良弼てうりやうひつといふ者を勅使
とし日本へつかはさんとてしよかんすでにと、

のふ時にちよくしわたりて日本國王にたい
めんせばなにほどのあいさつしかるべきやと申に
よりてその礼義のくらいさためがたしと

第八丁表

せんぎす 至元七年十二月大元より趙良弼
をかうらいへつかはしこの使者をかならず日本へ

わたしとゞけてよしみをつうぜよといふ又別に
大将三人につはものをさしそへ海邊にぢんを

とり此使者日本よりかへり来るまで相待て

そのやうだいを見よといふ 至元八年六月

曹介升さうかいせうといふ者申けるは此ごろかうらい人
わざとみちをとをくまはりて大げんの使

第八丁裏

者をみちびき月日をかさねてとうりうす

よろしき事にあらずふねにのりてちかきみ
ちありじゆんふうあらば半日のあいだに日本へ

つくべしあまたの軍兵す、みゆかばあんない
をいたさんといふ大元の王これをきよよう

す 同年九月かうらい王これをき、て
返事をもつて大元のちよくし趙良弼を

みちびき日本へわたしければ日本よりも其返報に

第九丁表

弥四郎といふ者を大元の國へつかはす大元
の王よろこびて弥四郎をもてなし日本へかへす

至元九年二月大元の人々そうもんしけるは
さきに日本へつかはさるゝ勅使申けるは去年九月

日本の弥四郎とおなじくちくぜんのさいふへ
おもむくそのしゆご所のことばに高麗より日

本へ申きたるおもむきは太元より日本をせめう
たんとすいさよくきけば大元の王はじひの心にて

第九丁裏

人をあはれみ勅使をわたし書簡をたまはりて念
比なり高麗人の申所は皆いつはりなりと今よく

しり侍るしかれども大元の都ほど遠ければ先
人をつかはし御返事を申さんといふこれによりて勅使

趙良弼はちくぜんのさいふに逗留して張鐸ちやうたつといふ

者に日本人二十六人を相そへ大元國にさしこし

皇帝へまみへしめんと云大元の王き、て是は日本

國王のいふ所かちくぜんのしゆごの云ことかとせんぎ

第一〇丁表

あり各これは大元のいせいをおそれて此人をきた

らしめて大げんのつよきかはきかをうかゞふ

はかりことなるべしたゞじひを以てよくあいさつし

さんだいせしむべからずとそうもんするにより

て大元の王にまみゆることあたはず

同月かうらい王より書状を日本へ進上

す五月又書状をもつて大元へよしみを

つうぜよとす、む日本より返事なし

第一〇丁裏

至元十年六月趙良弼又日本へわたりちく

ぜんのさいふよりかへる 至元十一年三月大元

の大將二人大船三百そうはやふね三百そう小

ふね三百そう合て九百そう兵一万五千人を以て

此七月をかぎり日本をせむべしと下知す

十月に日本へおしよせかつせんすされども

大元の軍法みだれてと、のほらず又矢だね

つきければつくしの海邊所々をらんばうして

第一一丁表

かへる日本文永十一年のときなり元史に見えたり

日本九十代後宇多院の代建治元年は鎌倉

北条の時宗か時にて大元のせいそ皇帝至元

十二年にあたるこのとし二月大元の使者

三人日本へわたりしよかんをさ、ぐといへ共

日本より返事なしそのしんすの名を杜世とせい

忠ちゆうといふ 至元十四年日本のあき人黄金を

第一一丁裏

もつて大元へわたり錢をかはんともめければ

大元きよようす 至元十七年二月日本にて

大元の使者杜世忠をころすこれによりて大

元の大將忻きん都と・洪こう茶ちゃ丘きう兩人みづから渡海し日

本をせめんとのぞむ五月大元の王范文虎はんぶんこと

いへる臣をめして日本をうつべき事をせんぎし

しよこくへふれまはして軍勢をよびあつむ

至元十八年正月大元の王阿剌罕あらかん・范文虎はんぶんこ・

第一二丁表

忻都きんと・洪茶丘こうちゃきう此四人をめして大將とし十

万人の軍兵をひきいて日本をせめよといふ

四人いとまを申とき大元の王云やうは日本より使者

来る故に我も又使者をつかはす日本わが使

者をとめてかへさずいさ四人をつかはす他國を取

事はその百姓土地をえむためなりもしみだり

に百姓をころさばたとひ國をとりても何かせん

そのうへ四人こゝろをやはらげよくはかるべく

第一二丁裏

なかあしくする事なかれ日本人きたりて物いひ

もんだうすることあらばなんぢら四人こゝろを

おなじうしてしかるべしくちくちく物いふことなかれ

といふ四人すぐにしゆつちんしいくさ評定

す阿刺罕・范文虎已下はひやうせんにのりて

かうらいの金州といふところへゆき忻都・洪

茶丘がぐんぜいと一つになりて日本をせむ

風水たよりあしきによりて壱岐のしまへわ

第一三丁表

たりてだんかふすおりふし日本人のふね

たゞよひきたりければその水手をとらへてゑづをか、

せ見てちくぜんさいふのにしにひらどしまあり

此所水もよしひやうせんをつなぐべきみな

となり日本よりこのしまにばんをおくことなし

いそぎ忻都・洪茶丘を壱岐のしまよりよび

よせ大勢みなおなじくひらどへあつまり合

戦せんと申す大元の王これをき、及びて

第一三丁裏

われゐながらその所のよきもあしきもしらず

阿刺罕にまかすよくはからへといふ六月阿刺

罕病にかゝりてゆくことあたはず八月大元の

大将范文虎以下みないまだ敵を見ずして

はいぐんすこれはちくぜんのさいふをせめんとする

ときにはかに大風ふいてふねおほくはそんな

されどもなをた、かはんとする所に物がしらの

万戸二人ならびに水手のかしら陸文政など云

第一四丁表

者下知をきかずしてにぐこれによりて軍勢

みなかつほといふうらへひきかへす敗軍の

うちに于間うまといふものにげきたりて申けるは

大元のぐんびやう六月ふねにのり七月平蠹ひらこと

いふしまにいたり五龍山ごりゅうさんへうつる八月一日大風

吹てふねをやぶる五日范文虎らの諸大将各よき

船にとりのり十余万のぐんぜいをば五龍山の

もとにすておく糧なくして三日のあゐだ物く

第一四丁裏

はず諸人さうだんし張百戸ちやうはくこといふ者をおし

たて大将とし木をきり船をつくりてかへらんと

す七日日本のつはものよせきたりてせめた、
かふ大元のつはものおほくうたれてさる所の
二三万人はみないけどりとなる八角嶋と云嶋
にてことくくきりころさるこのたび諸大將な
らびに役人おのくまちくにてたがひに談
合と、のほらざるゆへにみなはいぐんす于閭

第一五丁表

一人ふりよににげきたるそののち莫青と云
者呉万五と云もの二人又にげてかへる十
万人の内まぬかれかへる者此三人ばかりなり是も
元史に見えたり 日本の旧記に大元人二人
かうらい人一人唐人一人あはせて四人つくし
よりおくりきたる京都へはいらずぐに山
ざきだいちごちをへてくわんとうへおもむく建治
元年の事なり 世に日本は神國なれば神風

第一五丁裏

あらく吹て呉賊のふねをやぶりおぼらす
と申ならはすも此事なり
日本の弘安七年は大元の至元廿一年にあたる
かさねて又別の大將三人をもつて日本をせめんと
すすなはち使者をつかはしかうらい王もみづ
から出て加勢をせよといひやる時に大元の臣昂吉かうきつ

児じと云者そうもんしけるは日本のはたらきに
つゐてつゐへおほくたみつかれたりぐんぢんを

第一六丁表

やめよといさむこれによりて各せんぎして
日本は佛法をうやまふ國なりしゆつけをつか
はし日本のていを見せしむべしとて王積翁わうせきわうと云
者を使者とし如智にちといへる沙門をあいそへ
日本へわたす回船の人のうちに日本へきたる
事をきらふものありひそかにはかりことをたく
みて王積翁をさしころしければあいしたがふ
もの共みな日本へきたらず 元史げんしに見えたり

第一六丁裏

日本九十一代ふしみの院の代永仁六年北条の
貞時のときなり貞時は最明寺のまごなり
大元の成宗せいそう大徳二年にあたる 也速答児やそくたつじと
いへる臣あり兵をもつて日本をせめんといふ成宗
聞て時よろしからずしばらくしあんすべしと
いふ明年一山といへる禪僧をあきなひ船に
のせ日本へわたしそのありさまをうかがはしむ
これはさきに如智といへる沙門を日本へ

第一七丁表

つかはすべしとする同じきはかりことなり

元史にも紀政綱目にもあり

此時よりかまくら北条がはからひとしてはじめて九州のたんだいをちくぜんの國に

おき中国のたんだいをながとの國におく

事は呉國のてきのおそひ來む事をふ

せがんだめのそなへなりたんだいはしゆこの惣がしらなり北条貞時かの一山がはかり

第一七丁裏

ことをさとりこれをとらへ伊豆の國へながす

後にはしやめんしけれ共一山大元國へかへ

らばつみにあはん事をおそれつゝゐに

日本の南禪寺にて死す

日本九十九代後くわうごん院の應安元年

ろくおん院殿將軍せんげのとしなり大明の

太祖皇帝洪武元年にあたる 大祖すでに

第一八丁表

大元國をほろぼし天下をとりはじめてそく

ゐし四方の遠き國々までみなきたりし

たがふ日本もよしみを通ずべしと云おもむき

をしよかんにのせて使者を日本へ渡す此とき

よしののみかどの王子良懷つくしにましまし

菊池にもりたてられ関西親王と号し九州に

はびこりて大明の使者をおさへとめて京都へとほ

さず或はみづから日本國王と号して大明へ良懷

第一八丁裏

より返事することもありとなん大明にも此

事おぼつかなしとうたがふ

此ころの事にや日本より大明へ書状をつか

はすそのおもむきは大王すでに大元をうち

ほろぼし天下の王となるまことにめでたし

大明は大國なりときこゆわが朝は小國なるべし

大はつよく小はよはきことさだまれることなり

されども大なるがかならずしもかつべからず小なるが

第一九丁表

かならずしもまくべからずこれいくさのならひ

なりされは大明にしたがふといふともいくべき

にあらずたとひ大明にしたがはずとも死ぬべき

にあらずふねとくがとのあいだにて一戦して

勝負をけつすべし大王もし小をうつくしむ

こゝろあらばわがてういかんぞ大をうやまふ礼

なからんや云々此事日本の記録に見え

ず呉國の書にのせたり

第一九丁裏

日本百代後多んゆう院の康暦年中に
あたりて大明の大祖の大臣を胡惟庸と

云大祖にもちひられていせいつよかりけるが

つみありて法度にあはんことをおそれ野

心をさしはさみ日本の加勢をからんとす

あるとき日本の使者大明へいたる胡惟庸

ひそかに此使者にたいめんし隠密にやくそくし

かさねて日本ぶね渡海のととき日本のすぐ

第二〇丁表

れたるつはもの千人をまねきよせ胡惟庸お

のれが家にかくしおきむほんせんとす本意を

とげ大祖をうたば大明のぬしとなるべしもし

ことなりがたくは大明の御くらをかすめ財寶

をうばひとりふねにのりて日本へわたらんと

たくむ内談きはまりて胡惟庸そうもんし

けるはおのれが家に甘露くだれりこれはめで

たきものなれば行幸ありて御覽あれと

第二〇丁裏

申大祖許容しすでにゆかんとするとききんじゆ

の臣雲奇といふ者はしり來りて胡惟庸

ぎやくしんをたくみいつはりて行幸をのぞむと申

大祖おどろき内裏のたかきやぐらへのほり

はるかに胡惟庸か家のうちを見ればかくし

おけるつはものはなはだおほし大にいかりて

官人をつかはし胡惟庸をとらへてはりつけ

にせらるその一門同類ことごとく誅せらる

第二一丁表

そのかず一万五千人ばかりありといへり其後日本と

胡惟庸と内通ありしことあらはれければ大祖

げきりんしてすなはち日本と中絶す信國

公湯和といへる大将につはものをそへて海邊へつ

かはしあまたの城をきつて日本のおさへとす

日本百一代後小松院の時彦岐・對馬の海賊出

て大明の海邊をかすめとる大明の成祖皇帝

第二一丁裏

よりろくおん院殿をたのみ海賊をしづめしむろく

おんぬん殿下知して海賊の張本人をとらへて

その同類よたうをたいらぐ成祖よろこんで

ろくおん院殿をほめて銀千両金欄二百疋

ぬひもの、衣裳六十ぬひもの、帳しとね枕

むしろ銀のばん并にさらうつはもの、たぐひ

を享物とす

第二二丁表

日本百五代後柏原院の時大明人宋素卿と云者日本へ來り管領細川の政元をたのみ將軍法住院殿へつかへたてまつるある時素卿を使者とし大明へ遣す素卿渡海して

大明の武宗皇帝てうあいのぬいくわん劉瑾といふ者にまいなひたつとき装束をうけて日

本へかへる其後將軍万松院殿の時周防國大内介

義興西國の大名にて宗設と云者を使者

第二二丁裏

とし大明へつかはす此時の管領細川の高國は

四國の主なり沙門瑞佐と素卿とを使者として

大明へつかはす明州の津にふなつきの番所を

たて奉行をおき諸國商賈の者着岸の前後

次第に座上におく宗設これをしりてふねをい

そぎさきへつく瑞佐・素卿はのちにいたるといへども

奉行にまいなひて宗設よりも座上におく宗設腹

立し瑞佐をうちころす素卿はしりてにぐ

第二三丁表

宗設かつにのり時の奉行をうちころし所々

あまたらんばう放火す大明の王此事の子細を

よくき、素卿が賄賂のわたくしよりおこることなり

とて素卿をとらへてろうしやす宗設をばいかんとも

すべきやうなしこれによりて宗設帰朝す明州

の津の番所もやめられきんぜいなきゆへに

日本の海賊唐人をあなづりてあきないに

ことよせてらんばうやむことなしその、ち五六

第二三丁裏

年すぎて万松院殿より琉球人をもつて使

者とし大明へつかはし素卿がつみをゆるされん

ことをいひやる

唐船の能にそけいくわん人といへるはこの

素卿がことなるべし

又数ヶ年ありて日本と大明と勘合と、の

ほりければ折々往來あり 勘合は黄金を

もつて鑄たる印判なりその印判をおして日本

第二四丁表

より大明へわたるふねのしるしとす

その後天文二十年周防國の大内介没落

のとき勘合の印判焼失すこれより日本大

唐公儀よりの往來なき事正保三年まで

九十年にあまれり